

【学位論文審査の要旨】

本申請論文は、回復期にある中枢神経障害患者3名の「しびれている身体で生きる経験」とその意味を、長期にわたるフィールドワークをもとに、現象学的記述によって開示することをめざした学位論文である。

論文審査においては、まずは現象学的研究としての評価が研究の独創性ととも述べられた。これと併せて、現象学的研究を選択した根拠、及びメルロ=ポンティの現象学を現代の看護学研究の思想的背景とすることの意味が確認された。申請者へは、現象学的研究において重要な概念の意味、記述内容に関する詳細な説明、研究成果の一般化の確保、現象学的研究方法の看護研究への寄与、本研究成果の実践への貢献、今後の研究の発展などが問われた。これらの指摘や質問に対して、申請者は論理的で妥当な回答ができており、その質疑を通して本研究の課題も確認された。併せて、本研究が下記の点において、看護学及び看護実践に貢献し得ると判断された。

第1に、現象学的研究に至った経緯と研究の視点の定め方に独自性が見られた。中枢神経障害によって引き起こされるしびれは、緩和が難しく、かつ主観的で第三者の理解が難しい症状として議論される傾向にあったが、本研究は、その両者の見方を棚上げし、「事象そのものへ」と立ち返ることをモットーとする現象学に学び、「しびれている身体」という存在のあり方を見出した。現象学的研究に至る経緯の議論も論理的であり、またこの議論自体が現象学的研究のあり方を示すものであった。

第2に、しびれという現象の持つ特徴に基づいて、長期にわたるフィールドワークという方法を選択して取り組んだ点が看護学研究において意義ある成果をもたらした。この調査方法において申請者は、患者の傍らでその訴えに耳を傾けつつ、僅かな行為の変化をも見て取り、主観的で第三者が近づき難いとされていたしびれに関わる経験を分かち合うことを可能にした。さらに、病院から在宅へ移行する長期にわたる患者への同伴は、日常生活において接する物や人との関係のなかで、しびれがそれとして現れる文脈をも把握することを可能にした。こうした調査によってこそ見出された事象が多く見られ、研究方法の妥当性も評価された。

第3に、本研究の結果である「しびれている身体で生きる経験」の記述そのものが露わにした事象、及びその結果の看護への示唆が評価された。しびれは、身体の部分に限局した症状としてあるのではなく、様々な感覚の区別やその確かさが損なわれるような経験として、さらには、生活範囲の広がりによって様々な物との接触や人との関係の中で多様な現れをし、身体のまとまりを難しくしたり、時間経験の積み重ねを困難にさせて時間の繋がりのなさを生じさせるなどの経験となっていた。こうした記述は、患者の経験の理解に新たな視座を与え、現象学的研究の有用性をも示すことになった。

第4に、第1のとおり先入見を取り払い、第2で示したとおり、事象そのものへと立ち返って方法を吟味し、(第3)事象そのものの方から「しびれている身体で生きる経験」の成り立ちを記述した点である。現象学の看護への応用ではなく、患者の経験して

博士学位論文審査の要旨

いることを看護師である研究者が関わりながら丁寧に掬い上げ、その経験の成り立ちを記述的に開示された点は、真に「現象学的」とであると評価され、本研究で開示された事象とその記述は、現象学的看護研究、及び現象学という哲学そのものにも寄与しうる研究であると評価された。

以上より、申請論文は学位論文として評価でき、併せて、申請者は博士（看護学）の学位に相応しい学識を有していると判断し、合格とした。